

これまでのポイント

記号

道路標識や音楽のト音記号だけが《記号》なのではない。

身の回りのあらゆる《もの》は記号になり得る：時計、椅子、テレビ、etc.

なかでも、コトバは記号そのものである

「言語記号 (signe linguistique) は、モノと名辞ではなく、概念と音響イメージを結びつける

「概念と音響イメージの結合を記号 (signe) と呼ぶ」 [Saussure]

ソシュール, フェルディナン・ド (Saussure, Ferdinand de) : スイス 1857-1913

言語学者。ジュネーヴ生まれ。

現代言語学の創始者。パリ大学で歴史言語学を教え (1881-91)。ジュネーヴ大学でインド=ヨーロッパ言語学とサンスクリット語 (1901-13)。一般言語学 (1907-13) の教授となる。最も有名な著作『一般言語学講義』(1916) は彼の死後、学生のとった講義ノートをもとに編纂されたものである。“基本となるシステム”として言語に焦点をあてたことは、のちの記号論や構造主義に大きな影響を与えた。【岩波=ケンブリッジ『世界人名辞典』より】

記号とは、ないものの代理：不在の現前

「記号 (sign) あるいは表意体 (representamen) とは、ある人にとって、ある観点もしくはある能力において何か代わりをするものである」 [Peirce]

パース, チャールズ・サンダース (Peirce, Charles Sanders) : 米 1839-1914

哲学者、論理学者、数学者。マサチューセッツ州ケンブリッジ生まれ。

ハーヴァード大学で学び、1861年からアメリカ湾岸測量局に勤務。1879年には、ジョンズ・ホプキンス大学の論理学講師となるが、個人の研究に没頭するため、1894年に職を辞す。膨大な研究は死後8巻本(1931-58)として出版される。現代の形式論理学と関係論理学のパイオニアであるが、プラグマティズムの祖としてもよく知られる。自身とウィリアム・ジェイムズの仕事を区別するため、のちに自分の方法を“プラグマティシズム”と命名。彼の意味の理論は記号論の成立に貢献した。【岩波=ケンブリッジ『世界人名辞典』より】

記号の成り立ちや意味を問うことで文化的なるものが透けてくる

教室内での学生の座り方：日本的なるもの

一般言語学 [Saussure]

(言語学の対象)

言語活動 (langage) は ラング (langue : 言語) と パロール (parole : 言) から成る

「ラング：語活動の能力の社会的生産物、慣例の集合、一つの全体、分類の原理」

「パロール：概念から音響イメージへと至るアクティブな執行：個人的」

言語学の対象はラングである

言語は記号であるから、言語学はより上位の記号学に含まれる

「社会生活のなかで記号の生態を研究する科学：社会心理学の一部門になろう」

(言語記号の性質)

記号

「概念をシニフィエ (signifié : 記号内容 : 所記)、音響イメージをシニフィアン (signifiant : 記号表現 : 能記)、その全体を記号とする」

記号の恣意性

「シニフィアンをシニフィエに結びつけるきずなは恣意的 : 言語記号は恣意的である」

「《象徴》という語はシニフィアンとシニフィエの間に有縁性があるものを示すため、支障をきたす」

シニフィアンの線状性

「シニフィアンは聴きとる性質のものであるから、時間のなかで展開され、一つの次元で計測される」

(言語学的価値)

価値の体系

「言語は純粋な諸価値の体系以外のものではありえない」

「言語はまた、一枚の紙片にたとえられる。思考が表面であるとする、音は裏面である。表面を切り取ろうとすれば、裏面をも同時に切り取らないわけにはゆかない」

差異

「言語の中には差異 (differences) しかない。一般に差異は、これが生じるポジティブな項 (termes positifs) を仮定しているが、言語にはポジティブな項がない差異しかない。シニフィエあるいはシニフィアンを取り出してみれば、言語は、言語体系に先立って存在するようなイデオモ音も含みはしないが、この体系から現われる概念的差異や音韻的差異だけを含んでいる」

ロシア・フォルマリズム

二つのグループ

1915年にヤコブソンを中心に作られた「モスクワ言語学サークル」と、1916年にシクロフスキラによって設立された「オポヤーズ (詩的言語研究会)」の活動の総称 : 活動時期は十数年間
モスクワ言語学サークル

: ロマン・ヤコブソン、ボガトウイリョフ、ブスラーエフ、ヴィノークルなど

オポヤーズ (ペトログラード & レニングラード)

: ヤクブンスキー、ポリワノフ、スクロフスキー、エイヘンバウム、トゥニャーノフなど

主張

内容に対する形式の優位

《文学性》 (ある作品を文学たらしめるもの : ヤコブソン) の探究

オストラナーニエ (異化、非日常化 : スクロフスキー) : 芸術 (詩的言語) の手法

科学としての文学研究における《技法》の重要性

: 「文学研究が科学になろうとするならば、技法 (プリヨーム) を唯一の登場人物と認める必要がある。その上で根本的問題となるのが、技法の適用や正当化の問題である」 [ヤコブソン]

R・ヤコブソン：プラハからニューヨークへ

第1回国際スラヴィスト会議のための「テーゼ」（1929）

マテジウス、ハヴラーネク、ヤコブソン、ムカジヨフスキーの連名

新たな言語科学発足：音声学に対する音韻論の定立

ニューヨークでレヴィ＝ストロースにロシア・フォルマリズムとプラハの構造主義的方法を伝授する

レヴィ＝ストロース：音韻論の方法を、集団における無意識的なものの構造化をモデル化（『親族の基本構造』：1947）

詩（メタファー、類似性）vs 散文（メトニミー、隣接性）の峻別

「言語の二側面と失語症の二タイプ」（1956）

詩的機能の定式化

The poetic function projects the principle of equivalence from the axis of selection into the axis of combination,

文化記号論：ロシア文化記号論

Iouri Lotman & Boris Ouspenski, *Sémiotique de la culture russe*, traduit du russe et annoté par Françoise Lhoest, coll. < Slavica >, L'Age d'Homme, 1990.

Boris A. Uspensky, « A propos de la genèse de l'école sémiotique de Tartu et Moscou » (タルトウ & モスクワ学派の成立について), pp. 9-19

タルトウ & モスクワ学派とは何か？

モスクワ派：ウスペンスキー

：言語学から記号論にやってきた言語学者たちで、時に文学にもかかわる

タルトウ派：ロトマン、Z. G. Minc

：文学から記号論にやってきた学者たちで、時に言語学にもかかわる

双方の交流により、言語学にテキストやコンテキストへの関心が起こり、文学研究にはテキストのジェネレーターとしての言語への関心が強まった

両者の関係は、フォルマリストたちの、モスクワ言語学サークルとオポヤーズとの関係に近い
レニングラードでは、文学研究の華々しい成果が1950年代まで続く

：エイヘイバウム、ジルムンスキー、トマシェフスキー、バフチン、フリーデンベルク、プロップ、トゥニャーノフ、ゴウコフスキーなど

ロトマンはゴウコフスキー、ジルムンスキー、プロップの直系の弟子であるし、タルトウ & モスクワ学派はヤコブソンや、ボガトウィリョフ、バフチンらと個人的に意見を交換している

記号論タルトゥ&モスクワ学派はいかにして生まれたか？

1962年にモスクワで記号システムの構造研究に関するシンポジウム（科学アカデミースラブ研究所との共催）が開催された：サイバネティックスやタイポロジー構造研究との接点

シンポジウムでは、言語記号論、論理記号論、自動翻訳、芸術記号論、神話研究、非言語コミュニケーションシステムのランゲージ研究、難聴者のコミュニケーション記号論、儀式の記号論などを、ボガトウイリヨフ、Viatcheslav Vs. Ivanov、V. N. Toporov、L. F. Zegin、A. A. Zalizniakらがおこなった

イワーノフ、ビャチゴーススキー、トポロフ、ウスペンスキー、「文化の記号論研究のためのテーゼ」を発表：

「文化は、機能的に相関する様々な記号体系の総体・階層構造として、テキストの総体あるいはその機能の総体として考えられるし、またそれらのテキストを生成する有機的メカニズムとも考えられる。集団が複雑に組織された個人とみなすことができると同時に、文化も情報の処理・蓄積の集合的メカニズムとして個人の「記憶」のメカニズムとのアナロジーによって理解される。文化はテキストによって過去の経験を固定するとともに新しいテキストの想像のためのプログラム、指令ともなるのである」

1960-1961年に、ロトマンがタルトゥ大学で「構造詩学講義」を行う

1962年に Igor Tchernov がモスクワにきてシンポジウム出席者たちと交流し、テーゼをタルトゥへ持ち帰る

そのテーゼを見たロトマンが関心を示し、モスクワに出向きタルトゥ大学との共同研究を申し出る：1964年以降、「記号システム研究」など業績多数

記号論タルトゥ&モスクワ学派の特色

言語やテキストを中心に扱い、意味論ではなく形相の研究に傾斜：記号そのもの（cf. パース）ではなく、記号システムおよび構造関係（cf. ソシュール）を探究

テキストの二重のアプローチ

：記号としてのテキストと記号組織形態としてのテキスト　テキストは記号から派生した二次的概念として把握可能

：テキストは記号に対してオリジナルな概念ともなり得る（映画言語）

書かれている言語がわからなければ本が読めないように、芸術の特殊ランゲージがわからなければ芸術作品、映画、演劇度は理解できない

第二次モデルシステム（言語は第一次モデル）

【引用&参考文献】

- * トゥリオ・デ・マウロ、『「ソシュール一般言語学講義」校注』、山内貴美夫 訳、而立書房、1976
- * 『パース著作集2 記号学』、内田種臣 編訳、勁草書房、1986
- * 『ロシア・フォルマリズム文学論集1』、北岡誠司&小平武 訳、せりか書房、1982
- * 『ロシア・フォルマリズム文学論集2』、水野忠夫 編訳、せりか書房、1982
- * Yu・ロトマン、『文学理論と構造主義、テキストへの記号論的アプローチ』、磯谷孝 訳、勁草書房、1978
- * Yu・ロトマン、『文学と文化記号論』、磯谷孝 訳、岩波現代選書、岩波書店、1979
- * 『講座・記号論1 言語学から記号論へ』、川本&田島 他 編集、勁草書房、1982
- * Claude Lévi-Strauss, *Les structures élémentaires de la parenté*, Mouton, 1947.
- * Roman Jakobson, *Questions de poétique*, coll. <Poétique>, Seuil, 1973.
- * Roman Jakobson, *Essais de linguistique générale 1 - Les fondations du langage*, coll. <Arguements>, Minuit, 1963.
- * Thomas A. Sebeok (ed.), *Style in Language*, M.I.T. Press, 1960.